

中 華 人 民 共 和 国 の 旅

財団法人 日本植物調節剤研究協会東北支部長 藤 巻 竹千代

今年の3月15日から30日まで16日間、日中農業農民交流友好訪中団の一員として中国を訪れる機会を得た。羽田発で、上海、南京、揚州、西安、大寨、北京の順序で廻った。農業が主であるが、人民公社、農業科学研究所、農業展覧館、病院、学校、工場、労働者住宅のほか、名所旧跡など広くみることができたことは幸いであった。私は以前、華北農試に5年ほど勤務していたことでもあり、なつかしい思い出と深い関心をもって旅行をした。戦後30年を経過して激しく変わった中国、そして以前と変わらない中国をみることができたように思う。

中国内の旅行は、汽車・飛行機で、かなりの距離のように思ったが、地図をみると、ほんの一部に過ぎない。人口が8億で、面積が日本の26倍というから無理もない。広い中国の一部を歩いて、いろいろ紹介することは、“群盲象をなでる”ようなもので容易でないが、ほり下げたことや、農業関係わけても人民公社のことは、いろいろ報告されているので、目でみ、直接聞いた現象からだけいくつか拾ってみることにしたい。

＜近くて遠い中国＞

飛行機で羽田から大阪経由、上海まで3時間50分で行ける。“一衣帯水”とはよくいったものである。北京直行ならもっと短い時間で行けるが、便が少ない。私が盛岡から東京に出る

のに、特急で6時間にかかるから、それよりずっと短い時間で、時差1時間の中国に着いている。

もっと自由に行けて、思うように中国内を歩けるようになるのはいつのことかわからない。近いところにありながら、まだ自由に交流できないものだから、行ったことが欧米に比べて珍しいことになる。それでも、日本から中国に行く人の数は、向こうから来る人の10倍くらいになっているようだ。思想や体制を越えて、一衣帯水の隣国と友好関係をもつことが大切だと感じているし、中国では、どこでも歓迎してくれ、誠実な話し合いをし、日中友好を強調していた。

それに比べて、中国とソ連の関係は、まことにきびしい。例の覇権問題で、ソ連を社会帝国主義ときめつけている。日本の“北方領土返還には全面的に賛成し断乎として支持する”という話は一再ならず聞いた。

＜上海から南京、揚州＞

上海に着いた当初は、ちょっと戸迷ったが、30年ぶりに中国語の中に入って違和感がなくなり、話しあうことができた。通訳をとおしてである。中国国際旅行社が窓口で、はじめから最後まで案内してもらった。この旅行社は、世界各地から中国を訪れる多勢の外国人旅行者を受け入れ、これを接待する機関であるが、総社

は北京にあり分社は省にあって旅行中、最も世話になったところである。いわば国として迎えるのである。



写真1 上海の街

〔車が少なく自転車が多い。
昼夜開いている食料品店前〕

バスと汽車と飛行機で旅行した

まず、最初の上海までの日程の主なものをあげてみると、農業展覧館、嘉定県の馬陸人民公社を訪ねたり、欲ばって流通事情を知るために早朝の野菜市場をみたりした。また、長白労働者新村で、工場や施設とその家庭を訪ねた。夜は映画〈海霞〉と歌劇〈白毛女〉をみるといった、ハードスケジュールである。短い期間に多くをというのだから、こうならざるを得ない。これも、もちろん当方と中国側の打ち合わせのスケジュールである。このあと訪問した各地もかなりいそがしい日程であったが、農業だけでなく広くみることができたことはよかったと思っている。

上海から南京までは汽車で行ったが、軟席車と硬席車がある。私達の乗った軟席車は、日本のグリーン車に相当するものであろう。広軌だからゆったりしたものである。5時間余の途中駅では、なじみ深い蘇州、無錫など大きな駅で止まるたびに、駅名を撮ることを心にかけていた人がある。かつて、30余年前この地を歩いた

人へのお土産のためである。年輩の人達には思い出の多い人が少なくないと思う。あいにく、駅名の表示が日本よりも簡単なので苦労しているようであった。時々車内の女子職員が、テーブルにおいてある茶のみにお茶をついでくれた。テーブルには花の鉢もおいてある。その鉢の字もすばらしかった。

お茶とタバコは、どこでも出してくれる。乾燥する国柄だろうか。これは昔もそうであった。会議中でも大きな茶のみに何回もお茶を足してくれる。つがれるたびに飲むものだから小用も多くなり、次に出発するまでには用を足しておくように心がけなければならない。

窓外をみると、常熟米の産地の水田が続く。水田裏作の小麦がほとんどで、単作がないといってよい。実によく利用されている。水田の収量は、と聞くと、米と小麦の合計が示される。米だけの収量ではなくて、1年間に収(ム)当たりどれだけとれたかを重要視している。

この地帯は、1年3毛作で、それは次のようである。

小 麦	水稻早生	水稻晚生
(11月上、中播) (5月下収) (190日)	(4月中播) (8月下~9月上収) (100日)	(5月下~6月上播) (11月上収) (160日)

生育期間は延べ450日間となるが、育苗期間が早生35~40日、晚生2カ月を差し引くと、350日となる。労働力を多く投下しても生産をあげる方式を徹底している。各地でみた畑作でも同じことで、食糧生産に力をいれている中国の姿が窺える。

さて、目的地に着いてからは、旅行社で手配したバスで廻る。党の委員会から市の方々が案内してくれた。

南京では、江蘇省の農業科学研究所を訪ねたが、3:3制を行っていた。つまり、600名

の職員のうち $\frac{1}{3}$ は研究室に、 $\frac{1}{3}$ は農村に入って実際に農業改良指導にあたる。そして $\frac{1}{3}$ は、実験田、模範田の調査指導をする。こうして研究者は大部分の時間を農村に出向いて実践し、問題を解決し易く農民との経験を交流している。また、農業学習班がある。それは、各地域から実践経験をもつ農民が研究所で勉強し、帰村して科学技術を推進する人達である。これらは、プロ文革後、研究者は“農村に直結したもの”としてあらためたとしている。

南京から揚州までは、バスで3時間半のところだが、途中、揚子江にかかっている長江、大橋、上段の自動車道 6.7 km を渡った。下段の長さ 6.2 km の鉄道橋を勇ましく黒煙をあげて走る汽車を皆喜んで写した。「息子へのお土産だ」という人もいた。日本の汽車よりも、ひと廻り大きいだけに、なおさら雄大である。

揚州の江蘇省水利工程管理所をみて、揚子江の水を北京、天津まで 1,300 km もっていく工事をすすめる話には驚いた。北にある黄河ではなく揚子江からである。水の多い南から水の少ない北へ導入する構想は誰でもできるが、これを実行に移すのである。農業以外の水源にもするという。

中国の南は、雨量も多く河の水も豊富で水田も多いし収量も高い。従来、山東、河北、河南の三省は食糧の自給が出来ないで、南の食糧を北に廻していたが、これらの地域も自給できるようになったという。さらに、この工事が完成して灌漑ができるようになれば大変な増収になることは、長い間の農民の経験や華北農試時代の畑灌の試験でも明らかである。

河北の方は、年間雨量 500 mm 以下で、それも 7～8月に $\frac{2}{3}$ 降り、あとは乾燥状態が続く。北京方面の飲料水にもする計画ときいたが、

粘り強く実行する国民性からみて、必ずできることだと思う。驚くべきことだ。“南高北低”を解消する熱意が感ぜられた。すでに、淮河の水を揚子江におとす工事もでき、江蘇省内 100 万 ha に灌漑して、水害、干害を軽減して増産に大きく寄与したことを紹介していた。

＜南京から西安へ＞

南京から西安には飛行機で行った。40人乗りくらいのプロペラ機であるが、途中、鄭州で昼食をとった。飛行場の附近や飛行機からは写真を撮らないようにとのことで、さすがカメラを離さない人達も自粛した。

河南省の平坦地、中州平原つまり中原である。その名も中州ホテルでの昼食であった。ホテルの門のところには、銃剣の兵隊が立っていた。別に、いかめしい感じではなかったが、ホテルでこのようなのは、あとにも先にもここだけであった。

昼食後、再び機上の人となり太行山脈を越して西安に入った。荒々しい山脈の北側には風に散らされた雪が残っている。実に男性的で、カメラに収めなかったが、機上からの写真は禁ぜられているので我慢した。西安に近づくにつれてダムや整然とした運河があり、山のかなり上まで町がみえた。

西安は、かつて長安と呼ばれたところで、1,100年の歴史のある古都である。わが国の遣唐使や留学生の行ったところで、阿部仲麻呂の話もでた。今は人口 250 万になっている。

西安の中心医院で、ハリ麻酔の手術をみせてもらった。22才の蓄膿症の女性、29才のパセドウ氏病の女性、それに61才の男の人の頭の手術で、ハリ麻酔によるものであったが、はじめから終わりまで自由にみることができた。

私達も白衣を着て入室し、近づいて写真を撮る何回も撮った。あとで整理してみたらこの写真が最も多い。

いろいろ紹介されているように、手術中も本人と話していて手術後、本人自らたち上がり、歩いて行くのには驚いた。医師達は頭を下げがして手術中のその老人と話しながらやっている。痛まないか — 痛くない。

誰かきているようだが — 日本の友人達が中日友好できている。

— それは感謝する。など普通のやりとりであった。

このあと、医師団と1時間くらいの会議があったが興味深かった。

西洋医学と漢方医学と結合させ、患者の病気にあわせてやる三結合だという。ハリ麻酔のときに、ハリを別のところに刺して効果がでる科学的見解を質したところ、3学説があるが結論はでていない。しかし、何千年の経験を生かして実際にやっているもので、理論をつめるのはあとになるということであった。農業関係でも、まず実行ということが多いと思われた。この医師も農村まで巡回する。死亡の多い順は、高血圧と心臓病、次に癌だという。どこの国も同じであると思った。

例によって、極めて卒直に待遇を聞いた。病院の平均給60円、最低看護学校卒業直後の人39円、医師110円、最高180円という答えがかえってきた。

あとで訪問した、北京の理工系の清華大学新卒が40円（日本円換算約6,400円）であった。ほかで聞いても、同じようで、ここ10年くらい月給があがらないが、むしろ物価が少し下がり、生活費が安いので充分であるという答えがかえってくる。

この日に訪ねた陝西省博物館内にある古い時代からの碑林1,000余があって、その道の人なら何日見ても倦まないだろう。拓本にしたいものがたくさんあった。部屋の中央部にあった大きな「孔子の碑」が偶に移されているのが印象に残った。枇林、枇孔のあとである。

＜西安から大寨＞

陝西省西安から山西省陽泉まで、火車（汽車）で15時間30分かった。時間節約上移動は夜である。陽泉駅からバス1時間半で目ざす大寨（さい）に着いた。

中国のどこにいても“農業は大寨に学ぶ”運動がある。どんなへき地に行っても塀に、1字が1メートルくらいの大きさで“農業学大寨”と大書したスローガンがある。

その大寨は標高1,100mにあって、3月末であったが夜は寒く小雪が降った。まる3日滞在して人民公社、生産大隊と3カ所をみ、話しかうことができた。ここを模範として、全国的な運動をしているだけに、参観者が年間80万人もあるという。そのために県の委員会から職員が来て、専門に案内説明している。

私達が、現地の畑をみて廻ったときも、大寨の農民は来訪者に関係なく、自分達の作業を続

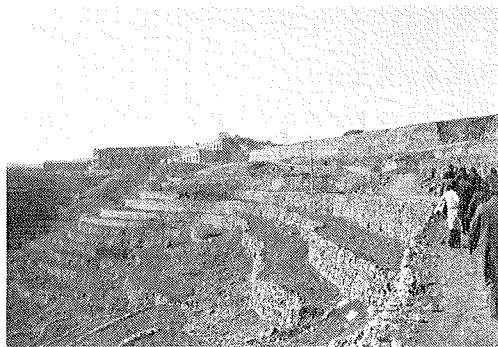


写真2 大寨の谷を埋めてつくった段々畑と集団住宅

（大寨人民公社、南増生産大隊）

けて振りむく人もなかった。男の人達は、4人1組で切り出した石をかつぎ、段畑の石垣づくりの重労働をしていた。別の場所では婦人達が運ばれた土を均らし、木の根を取り去っていた。冬の間の基盤整備の続きである。谷を埋め石垣を築いて広がった圃場では、トラクターで深耕していた。海綿土壌づくりである。

このリーダーであり、現在副首相の地位にある陳永貴氏は、貧農から地主とたたかい、ついに今日の大寨を築いた人であるが、北京、全国の指導、地元の生活と1/3づつだという。

大寨については多く紹介されているので省くが、人民公社は共通的には大体次のようである。農村人口が約6億5千万で人民公社は現在7万4千余りあるといわれるから1公社平均9,000人、戸数1,800になる。そして生産組織は、人民公社、生産大隊、生産隊の三層構造になっている。

生産隊は、自然集落20～30戸、生産大隊は6～8の生産隊で構成されている。人民公社の中に、学校も、病院も農機具修理工場もあって、経済の単位であると同時に政治、社会の単位でもある。その管轄の範囲にあるすべてのものに対して権力を行使する政権の末端の単位であるといえる。

<大寨から北京へ>

陽泉から北京に汽車で6時間40分、これも深更に出発して朝に着くようにした。寝台車は2段でゆっくりしていて楽だ。昔、えん錫山の山西モンロー主義で山西省だけは鉄道も日本同様の狭軌であった。北京から太原に行ったときには乗り換えた記憶があるが、乗り換えなしできたところを見ると、一様に広軌になったようだ。

最後に訪ねた北京は、やはりなつかしかった。ここでは、古い北京と新しい北京をみた。清華大学を訪ねたときは、鄭小平副首相が解任される直前で“鄭小平批判”の激しいときであった。また、ソ連の覇権問題に対するきびしさは、私が考えている以上のものであった。その代表的なものとして、案内してもらった北京の地下防空壕にそれを感じた。



写真3 新しくなった北京駅

古い北京は、横道に入ると、ひっそりした胡同、名は変わったが昔の紫禁城の故宮、万寿山の頤和園、八達嶺の万里の長城など、時代が移ってもこれからも長く保存

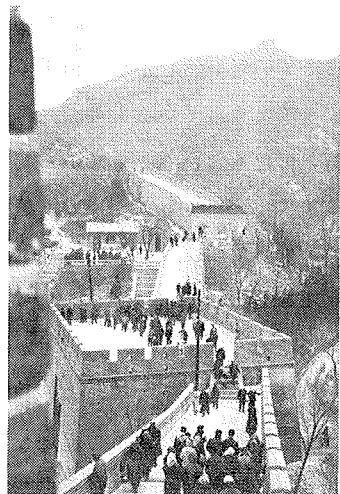


写真4

されるだろう。今も変わらない八達嶺の万里の長城ただ、説明の最後に「これらは、人民の膏血をしぼってつくった遺跡である」とつけ加えられる。

<服装>

衣服は単純で皆同じである。男は例の人民服に人民帽の同じ色のものである。女性も同じでスカートをはいている人は1人もいない。スチュワーデスさえもそうである。私も随分注意してみたが、以前の長い裾のほうがわかれた着物はついぞみなかった。

昔は、日本と中国の習慣のちがいから、日本人からみると中国の女性が裾のわれ目から太ももをあらわに出しているのが珍しくみられ、逆に、日本婦人が素足を出して歩くのが奇異の目でみられた。昔は、中国の女性が素足を他人にみせるなどは大変なことで、膚を許すことに通ずるということと絶対に露出することはなかった。まだはだ寒い季節のせいもあったろうが今でも素足を出して歩いている人はいない。男女とも、ズックの靴が多いが、中国の靴は軽くて歩きよい。同行者中には早速これを求めて愛用した人達もある。

デパートで、人民服をみたら上等のもので32元であった。大学卒の初任給は40元である。普通のものはこんなに高くない。

一行には、帽子を買ってかぶって旅行した人達もいるが、服装を同じにすると日本人と中国人の区別がつかなくなる。

南京では、桃が開花中のところに雪が降って震えあがった。早速防寒外とうを借用した。ドテラと名づけて南京、揚州の3日間この外とうのお世話になったが、棉の入った暖かいものであった。大寨でも雪がちらつき、これを着用したが、これに人民帽をかぶると日本人か中国人かわからなくなる人が多い。

棉のついでに、棉の産地にある西安の紡績工場の労働者住宅を訪ねたときのことを紹介しておく。67才と61才の老夫婦の家庭であった。この人は、長い間勤めた機械修理工で、60才

で退職、現職時代の7割支給されていて病気も無料診療だから安心だと説明してくれた。

＜おわりに＞

紙数も尽きたので全般的な印象を記して終わることにしたい。

まず、8億の人口の食べもの、着るもの、使うものは、農業で解決しなければならないものが多いとしている。自分で解決、自主独立を貫き、自力更生で食糧生産、農業生産をあげることに全力投球している印象を受けた。そして自給ができ、貯蔵をはじめている。中国国民経済発展の総方針は“農業を基礎とし、工業を導き手とする”ということは何回も説明された。農民の朝早くから日没まで働く勤勉な生活をみた。そして、昔の貧しく、ひどい生活と比較して、今の生活がよくなったと、しみじみ話してくれた。まだ貧しいが、希望をもって働いていることが感ぜられた。

また、昔の日本との戦争にふれることは極めて少なかったが、歌劇“白毛女”で眼鏡をかけ軍刀をもった日本将校がでてくる場面がある。それから、大寨の農業展覧館内の一部に青龍刀など陳列されているところがあって、説明の中に、大寨村は日本軍から目の敵にされ、1942年、村の42人の青壮年が殺されたというところがある。ここでは何ともいたたまれない気持になる。

それに対して、それは、日本軍閥のやったことで、日本人民の責任ではない、侵略を防ぎよしなかった中国も悪い、といってくれた。日本との過去のことは一切関係なく、世々代々の日中友好が大切だといってくれるのである。どこでも心よく迎えてもらったが、大国民であると感じた。

中国は、社会主義国として世界中にかつてな

い大きな実験を行い、進行中であると思う。

畑作雑草の生態と防除

千葉県農業試験場畑作研究室 竹内 栄次郎

はじめに

畑作の雑草生育は、作物の播種（植付）とともににはじまり、除草作業は一時も省けないものである。とくに日本での一般露地栽培は、梅雨期のため雑草の生育が旺盛で、作物との競合が激しい。また、最近ではそさい栽培などのマルチ栽培、トンネル栽培の普及による被覆下の雑草防除の省力化が問題となっている。

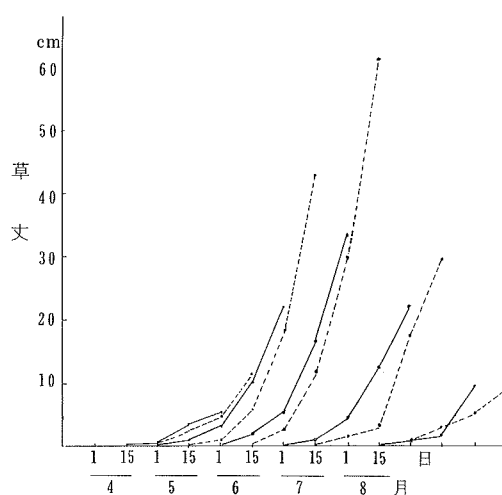
除草剤利用も近年かなりの適用除草剤が畑作作用にも実用化され、使用の面でも体系化されてきたが、必ずしも充分利用されていない。このことは、畑地雑草の発生が、気象・土壌・作付時期・作付体系などによって一筆毎の雑草発生に普遍性がなく、相違が大きいことにもよる。この中で、立地条件などによってもかなり異なるが、耕種・除草管理などの人為的影響によって、草種・組成・生活型が変化している場合が多く、畑地雑草は、草種・生態・組成・生活型は多様で、一般的汎論で指標をもつことは難かしい。本稿では、千葉県内の現地畑雑草の事例を述べ、参考になれば幸いである。

1. 雑草の生育相

雑草の生育相は、発芽時期により異なる。裸地生育での2～3の草種についてみると、次のようである。

メヒシバ

発芽は4月中旬から10月上旬までみられる。4月中～下旬発芽のものは生育速度が遅く、45日で茎数1～2本、60日で2～3本となり、草丈は4～10 cm程度となる。また、出穂は発芽後60日以上かかる。これに対し、5月発芽は30日で分けつがみられ、45日には茎数は5本程度、草丈が10～20 cmとなり、60日で茎数10本前後、草丈20～40 cmとなり、ときには出穂も認められる。6月発芽のものはさらに生育は早く、6月中旬発芽のものは15日で茎数2～3本、草丈2～5 cmとなり、30日には草丈が10 cm以上に達するものもある。その後の生育も旺盛で、45日には茎数6本以上、草丈30 cmとなり、60日には平



第1図 メヒシバの発芽時期別草丈
(1968年千葉農試)